

『御堂関白記』の感情表現

清水 教子
Noriko Shimizu

一 初めに

『御堂関白記』（以下、本文献と呼ぶことにする。）は周知のように、平安中期の公卿藤原道長の日記である。政治家としての道長の日記は、内容から見て有職故実に関するものが大部分である。したがって、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』などの平安女流日記に見られる、恋愛を主とする私的情感の細やかな内容のものとは比べ、本文献が感情表現に乏しいことは言わば当然であろう。しかし、道長も、道長によって記されている登場人物も、人間である以上、折に触れて感情を現にしているのである。その点に目を向けて、仮名文学作品とは違う和化漢文としての、更に厳密に言えば記録語資料としての、本文献の感情表現の実態を分析し総合すること、これが本稿の目的である。その結果が道長個人の表現方法であるのか、それとも、平安中期の記録語資料に共通に見い出される表現方法であるのかは、今後の課題である。それは、道長と同時代の他の公卿の日記、藤原実資の『小右記』（天元元年978から長元5年1032まで）や、藤原行成の『権記』（正暦2年991から寛弘8年1011まで）などを調査してみて、初めてわかることだからである。

二 道長と本文献

道長は康保3年（966）に生まれ、万寿4年（1027）に62歳で亡くなっている。ちなみに、同時代の実資は道長より9歳年長で、永承元年（1046）に81歳で、行成は道長より6歳年少で、道長の没年と同じ万寿4年に56歳で、それぞれ亡くなっている。道長の官位は、長徳元年（995）6月19日30歳で右大臣氏長者に、翌長徳2年（996）7月20日31歳で左大臣正二位に、長和5年（1016）正月29日51歳で摂政に、翌寛仁元年（1017）12月4日52歳で太政大臣従一位に、という昇進振りである。寛仁2年（1018）2月9日、53歳で太政大臣及び内舍人隨身を辞している。また、本文献に欠けている記事については、『小右記』などで補うことができるが、それによれば、道長は54歳の時に出家して法名を行願と称したことがわかる。すなわち、『小右記』の寛仁3年（1019）3月21日の記事に、「宰相来云 大殿出家了 法印院源為戒師（中略）余問御名 答云 甚無便御名也 行願者」とある。道長の最期については、同じく『小右記』の万寿4年（1027）12月4日の記事に、「巳時許式光来云 禅閣昨日入滅 而臨夜有揺動気云云 今寅時已入滅」とある。政治上、道長と対立していた実資は、道長の臨終に立ち会っておらず、しかも道長の死を悼む気持ちを日記に残していないが、道長を禅閣（禅定太閣の省略形）と呼んでいたことがわかる。

ところで、本文献については、道長の自筆本14巻と平安時代の古写本12巻とが、財団法人陽明文庫に現存している。それは、長徳4年（998）7月から治安元年（1021）9月まで、道長33歳から56歳まで、約24年間に及ぶ日記である。その間の道長の身分は、左大臣から令制上の最

高官である太政大臣までという、当時の政治家として最高のものである。筆者が本稿の調査資料として用いたものは、上述の陽明文庫所蔵のものを底本として活字化したもの、すなわち、東京大学資料編纂所編集の『御堂閔白記』上中下三冊（昭和52年1977第二刷発行、岩波書店）である。この活字本は、年紀の欠けた部分の記事を、京都大学附属図書館所蔵の平松本五冊で補ってある。原本・活字本共に縦書きであることは、言うまでもない。しかし、筆者は都合上具体例を横書きに直して引用することにする。しかも、旧字体はできるだけ新字体に直し、踊り字は元の漢字に直して引用する。例えば、長徳四年七月五日の記事（上巻4 ページ所収）は、「仰有諸寺仁王經転読事（長徳四 $\frac{7}{10}$ 上4）」のように記すことにする。

なお、後出の一覧表の用例数については、調査が不十分なため、少なくとも何例あるという風に解釈していただきたい。

三 単語の認定とその読み方、及び訓読文

記録語資料を調査する場合、先ず困難なのは、単語の認定が難しいことと、その読み方が決めにくいこととである。仮名書きの部分もまれにあるが、大部分漢字ばかりで記されていることが大きな原因になっている。また、その単語が字音語なのか和語なのかをも、決めにくいことがある。まして、訓読文ともなれば、どのような言葉（主として助詞・助動詞・形式名詞）を補って読めばよいのかで、またまた難しくなってしまう。これらの問題点を解決して初めて、厳密な意味での表現や文体を論ずることができるのであるが、本稿で筆者が目指すところは、本文の感情表現を、更にはその表現形式を、大雑把に捕らえることである。その点で、正確な訓読文になり切っていないことを容赦されたい。

それで、単語の読み方を仮に決めるについては、平安時代の書記言語生活に利用された国語辞書の読み方をより所とする。それは、院政期成立、鎌倉時代書写の三卷本『色葉字類抄』である。具体例を引用する場合、単語の読み方や訓読文は、字音語を片仮名で和語を平仮名で記すことにする。

四 本文の感情表現

感情表現という場合、すぐ思い浮かぶのは喜怒哀楽の表現である。無論、この四つ以外にも様々な感情がある。本文には、怒と楽の感情表現は見当たらないようである。喜は、主として道長一族や他の貴族たちの官位昇進、皇子や皇女の誕生、などに関する場合に、哀は、道長と親しい人々の出家や死に関する場合に、それぞれ多く見られる。喜・哀のいずれにも属させかねるものもある。そこで、人間にとってその感情が快か不快か、という観点で大きく二分して述べることにする。例えば、喜は快に、哀は不快に、それぞれ属することになる。ただし、感情表現というと、直接的具体的表現と間接的抽象的表現とがあり、両者の表現の次元は異なると考えられる。しかし、本稿ではその分類まではしないことにする。

1 快を表す場合

快を表す場合は、喜びに関するものがほとんどである。字音語感悦（カンエツ）・慶賀（ケイガ）・賀（ガ）・随喜（ズイキ）・感懐（カンクワイ）・満足（マンゾク）、和語悦・慶・喜（三語とも、よろこび）、悦・慶（二語共に、よろこぶ。）及びその複合語——見悦（みよろこぶ）、聞悦（ききよろこぶ）、悦思（よろこびおもふ）——、涙（なみだ）などが用いられている。

(1) 感悦 (カンエツ)

感悦 (カンエツ) は、心に感じて喜ぶこと、という意味である。① 左近将監物部武能一度中兄矢 衆人感悦 (寛仁元 $\frac{5}{8}$ 下88) のように、感悦だけを用いるのが基本である。感悦の程度まで示したのものとしては、② 中宮惱気御座由示来 即参入 候宿 主上両三度渡御 感悦不少 (長和元 $\frac{5}{8}$ 中170) ③ 乗方朝臣集注文選并元白集持来 感悦無極 (寛弘元 $\frac{5}{8}$ 上113) ④ 参内 退出間 摂政合途中 下従車居 侍従中納言与摂政同道 同下居 無為方留車示可立由 而良久不立 依程經過了 路頭者感悦尤深云云 (寛仁元 $\frac{5}{8}$ 下97) ⑤ 公成朝臣為勅使来云 石清水可有競馬者 仍給左右寮馬各一疋者 是皆一足 左尾白 右古比千 感悦余身 (寛仁元 $\frac{5}{8}$ 下118) などがある。すなわち、②は形容詞少なしの否定形不少 (少なからず) を、③はこの上ないという意味の形容詞無極 (きはまりなし) を、④は第一にとという意味の程度副詞尤 (もとも) で修飾されている形容詞深 (ふかし) を、⑤は余身 (身に余る) を、それぞれ伴っている。④は言うまでもなく、程度副詞尤が形容詞深 (深し) を修飾して最上級の表現になっている。また、忙しいことという意味の字音語多端 (タタン) を用いた例 ⑥ 此間東泉渡殿三后有御対面 見者感悦多端 (寛仁二 $\frac{5}{8}$ 下182) や、感悦を二つ重ねた例 ⑦ 此間尚微雨降 御出間不降 感悦感悦 (寛弘二 $\frac{5}{8}$ 上137) もある。

以上、7例の中では、③無極と④尤深を伴ったものは最上級を表している。②不少や⑤余身、⑥多端を伴ったもの、⑦感悦を重ねたもの、などは③④より感悦の程度は低い、①感悦だけのものよりは程度が高い。

(2) 慶賀 (ケイガ) と賀 (ガ)

慶賀 (ケイガ) は喜び祝うこと、賀 (ガ) は喜びの意を表すこと、である。慶賀は祝うこと、賀は表すこと、という動作がそれぞれ付け加わっているが、感情表現として扱う。慶賀も賀も、言うという意味の動詞と一緒に用いられている例が多い。内容からは、両者共に官位の昇進が叶った時の喜びが多い。⑧ 参弓場殿 奏慶賀 是権大納言依兼大将也 (長和四 $\frac{4}{8}$ 下31) ⑨ 従頭中将許消息持来 披見 賜両女御従二位者 右府申賀退出云云 (寛弘二 $\frac{5}{8}$ 上128) など。⑧奏慶賀 (ケイガをソウす)、⑨申賀 (ガをまうす)、のように、慶賀も賀も間接的抽象的表現であり、それぞれの程度を示す修飾語は用いられていない。

(3) 随喜 (ズイキ)

随喜 (ズイキ) は、心からありがたく思うこと、という意味の仏教用語である。⑩ 供養舍利会 (中略) 座主綾掛一重袴 諸僧綱掛一重 随喜又同 (寛弘六 $\frac{4}{8}$ 中4) ⑪ 余発願云 若命及明年東金堂可奉作者 僧成随喜 (寛仁元 $\frac{5}{8}$ 下107) のように、随喜又同 (随喜又同じ)、成随喜 (随喜を成す) と用いられている。また、随喜の程度は、⑫ 見聞道俗随喜尤深 (寛弘六 $\frac{4}{8}$ 中24) のように、程度副詞尤が形容詞深しを修飾することで表されている。

(4) 感懐 (カンクワイ)

感懐 (カンクワイ) は、心に感ずる思い、という意味であり、すばらしさや珍しさに感動した時に用いられている。⑬ 有曲水会 (中略) 羽觴頻流 移唐家儀 衆感懐 (寛弘四 $\frac{4}{8}$ 上213) など。感懐の程度は、⑭ 左衛門督云 夜部二星会合見侍りしと (中略) 件事昔人人見之云云 近代未聞事也 感懐不少 (長和四 $\frac{4}{8}$ 下18) のように、(1)感悦のところで見られた不少を用いて表している。

(5) 満足 (マンゾク)

満足 (マンゾク) は、望みが満ち足りて不平がないこと、という意味である。⑮ 件事返返見悦不少 現世後生願満足也 (寛弘五 $\frac{5}{8}$ 上259) のように、満足也とあり、満足という言葉の意味からして、修飾語が付け加わることはないと考えられる。

(6) 悦・慶・喜 (よろこび)

名詞よろこびは、悦・慶・喜と三種類の漢字で表記されているが、用法上の差異はほとんどないと考えられる。基本は⑯ 従申時許雨降 下人等為慶 (寛仁二%下156) のように、為慶 (慶びとす) とだけあって、何も修飾語が付かない。よろこびの程度は、⑰ 春宮大夫年来間語人也 今日忽退家所奉志 非可云 為慶無極 (長和二%中196) のように、形容詞無極 (きはまりなし) を用いること、⑱ 夕方定基来云 被申悦事無量者 (寛弘五%上259) のように、はかり切れないほど非常に多い、という意味の形容詞無量 (はかりなし) を用いること、⑲ 是従去六月朔 日日雨下 為農尤作慶 (寛弘五%上265) のように、程度副詞尤を用いること、⑳ 是国再拜立舞 此間盃酌数巡 悦身余泥酔不覚 (寛弘四%上238) のように、悦身余 (悦び身に余る) という言い回し、㉑ 如夕立雨下 万人為悦為悦 (寛弘八%中114) のように、為悦 (悦びとす) を繰り返すこと、などによって示されている。形容詞無量を用いる以外は、(1)感悦のところでも既に見られたものである。

(7) 悦・慶 (よろこぶ) , 及びその複合語

動詞よろこぶは、名詞よろこびと同様、悦も慶も用法上の差異はほとんどないと考えてよい。単独動詞としては、㉒ 其次見勝蓮華院 座主有悦氣 (寛弘元%上103) のように、有悦氣 (悦ぶ気あり) と用いられ、どの程度に悦ぶ気配があるのかまではわからない。複合動詞としては、見悦 (みよろこぶ) , 聞悦 (ききよろこぶ) , 悦思 (よろこびおもふ) などがある。いずれも、程度を示す不少や無極と一緒に用いられている。(5)満足の⑬の例のように、見悦不少 (見悦ぶこと少なからず) , ㉓ 左大将皇太后大夫以下 左衛門督髪上被物云云 聞悦不少 (寛弘七%中81) のように、聞悦不少 (聞き悦ぶこと少なからず) , ㉔ 右府御車下未天 被參悦思不少 (寛弘六%中14) のように、悦思不少 (悦び思ふこと少なからず) という風である。また、無極は㉕ 右府内府被參 昨日毛被參南院 両度參慶思無極 (長和二%中196) のように、慶思無極 (慶び思ふときはまりなし) とある。よろこびの程度を示すのに、不少や無極を用いるのは、(1)感悦のところでも既に見たものである。

(8) 涙 (なみだ)

涙 (なみだ) は、喜びやありがたさから出る嬉し涙である。㉖ 次至座主房相示参入并今日不発給由慶 次以馬一疋志之 座主有慶氣流涙 (寛仁二%下174) のように、流涙 (涙を流す) , ㉗ 祈請打火不及二度 一度得火 (中略) 見聞道俗流涙如雨 (寛弘二%上163) のように、流涙如雨 (涙を流すこと雨のごとし) とある。㉗は、非常に感動したことを示すのに比況の表現を用いており、具体的に述べられている。

2 不快を表す場合

本文献で不快を表す場合は、喜怒哀楽の哀に属するものが多いが、その外のものもある。字音語恐恐 (キョウキョウ) ・不快 (フカイ) ・不覚 (フカク) , 和語では名詞愁 (うれへ) ・恐 (おそれ) ・恨 (うらみ) , 動詞愁 (うれふ) , 恐 (おそる) 及びその複合語、憐 (あはれぶ) 及びその複合語、嘆 (なげく) 及びその複合語、驚 (おどろく) 及びその複合語、形容詞悲 (かなし) , 糸星・糸惜 (いとほし) , 口惜 (くちをし) , 心細 (こころぼそし) などが用いられている。

(9) 恐恐 (キョウキョウ)

恐恐 (キョウキョウ) は、(ア)こわがることという意味では、㉘ 丑時許有雷音 又暁後数度 雷電数度 其音太大也 為恐恐 夜風甚烈 (寛弘七%中81) のように、為恐恐 (キョウキョウとす) , (イ)恐れかしまることという意味では、㉙ 仰云 兩人親王各可叙一品者 (中略) 兩親王參中宮御方 被啓賀 大夫啓之 恐恐不少 是我君達也 (寛弘四%上219) の

ように、恐恐不少（恐恐少なからず）と用いられている。⑳は恐恐の程度を示しており、(1)感悦で既に述べたところのものである。

(10) 不快（フカイ）

不快（フカイ）は、和語ころよからずの可能性もあるが、一応字音語としておく。意味は、嫌な気持ちがすることである。㉑ 浄妙寺供養（中略）堂僧時剋吹螺 新螺声未調不快（寛弘二₉上163）のように、不快、㉒ 召陰陽師等問云 件精進不快事度出来 奉使如何（寛弘八₂中96）のように、不快事（フカイのこと）とあり、いずれも不快の程度は示されていない。

(11) 不覚（フカク）

不覚（フカク）は、人事不省になるさまであるが、本文献では、気絶してしまうほどの悲しみや驚きなどに用いられている、と考えるほうがよさそうである。㉓ 巳時許慶僧都来云 山侍間 此暁馬頭出家 来給無動寺坐 為之如何者（中略） 人人多来問 渡近衛御門 母乳母不覚 付見心神不覚也（長和元₁中133）は、馬頭が出家したことでその母や乳母が悲嘆にくれている、その様子を目の辺りにした道長も衝撃を受けた場面である。また、㉔ 還御間 従京人走来云 采女町火付焼了 件火欲付西廊間 人多上滅了 心神不覚 先思東宮御在所（長和二₂中254）は、火事のために道長が非常に驚きあわてたことを示す場面である。

(12) 愁（うれへ）

愁（うれへ）は、(ア)嘆いて心中を訴えること、という意味では、㉕ 入夜筑後守文信不能呵法 申参上由 為申愁公家也（寛弘六₁中17）のように、為申愁公家也（公家に愁へを申さむためなり）とあり、愁への程度が大きいことは、㉖ 其後又法師二人来申云 以正滴所示下手者早可被送 大愁也云云（寛仁二₃下149）のように、大愁也（大きな愁へなり）と愁へに修飾語を付けることで示している。(イ)悲しみ、の意味では、㉗ 従巳時許雨下 甚雨也 五六日間天晴 為衆人悦間 又降 人愁無過斯（寛弘七₂中76）のように、人愁無過斯（人の愁へこれに過ぐること無し）、㉘ 従春雨下乏 就中従去月十許日不雨下 天下愁甚盛（長和元₂中163）のように、天下愁甚盛（天下の愁へ甚だ盛ん）とあり、いずれも愁への程度を示している。(ウ)心配、の意味では、㉙ 日来蝗虫喰田所云云 就中丹波国尤有愁者（寛仁元₂下112）のように、尤有愁（もとも愁へあり）とあり、程度副詞尤を用いている。なお、㉚については、二日後の日記に「深雨 雷有声 虫悉死無愁云云（寛仁元₂下112）」とあり、心配がなくなったことがわかる。程度を示すのに、㉖のように連体詞大きなを用いること、㉗のようにこれに過ぐること無しという最上級を用いること、㉘のように程度副詞甚だを用いること、などは今までに見られなかったものである。

(13) 愁（うれふ）

愁（うれふ）は、(ア)自分の嘆きを他人に告げる、という意味で、㉛ 学生源頼成愁申云 昨日判頼成文題無字書不 以之為難 落第 而紀重利已無改字 彼已及第者 以之為愁者（寛仁二₂下184）のように、愁申云（愁へまうして云はく）がある。(イ)悲しむ、という意味では、㉜ 従去月廿八日不雨下 田頭有愁気云云（寛弘六₂中9）のように、有愁気（愁ふるケあり）がある。いずれも、愁ふの程度を示す表現にはなっていない。

(14) 恐（おそれ）

恐（おそれ）は、(ア)こわがること、という意味で、㉝ 直講善澄前得業生 問答間 善澄如狂人 未如此奇事 衆人成恐 若是狂歎 若醉歎 是本性云云（寛弘四₂上221）のように、成恐（恐れを成す）がある。(イ)神仏や目上の人などに対し慎むべきこと、という意味では、㉞ 右府参賀茂 有頼通彼共 是宮参大原野給被供奉 依此恐所奉也（寛弘二₂上142）のよう

に、此恐（この恐れ）、④ 候御前 書叙位 以道方被仰云 可賜一階如何 奏聞云 官位共高 仕公間非無其恐 不賜為慶（寛弘五 $\frac{5}{10}$ 上272）のように、非無其恐（その恐れ無きにあらず）、④ 右大将相語云 賀茂祭雖有触穢事 神御心尚可祭也 是則齋院下部并院御夢催事度度見給云云 以之云之 前年小野太政大臣夢相同之 為恐不少（長和元 $\frac{1}{10}$ 中152）のように、為恐不少（恐れとすること少なからず）がある。④は二重否定の形式をとることにより、肯定の意味が更に強められていると考えられる。④の不少は、(1)感悦で既に見た表現形式である。

(15) 恐（おそる）及びその複合語

恐（おそる）は、(ア)圧倒されて心がひるむ、という意味で、⑤ 宮被仰云 尚侍可立后事早 早可吉者 余申云 宮御座恐申侍 是以未申如此事也（寛仁二 $\frac{2}{10}$ 下170）のように、恐申侍（恐れまうしはべり）がある。程度を示すには、前述の不少や無極が用いられている。それは、⑥ 依十三日物忌参賀茂（中略） 同道上達部十一人 大納言春宮大夫御座 恐申不少（寛弘三 $\frac{3}{10}$ 上179）、⑦ 相撲五番有召事 如前儀 是余不参召合 仍有御意 恐申無極（寛弘四 $\frac{4}{10}$ 上230）である。(ア)の意味の複合動詞は、恐思（恐れ思ふ）や悦恐（悦び恐る）があり、次のようにいずれも前述の不少と共に用いられている。⑧ 小女子為着袴 人不知 而人人見気色 両大臣右大将外上達部十余人 殿上人廿人許来 事忽恐思不少（寛弘八 $\frac{8}{10}$ 中129）、⑨ 昨日依至事 中宮大夫左衛門督家被来云云 未聞大納言来中納言家 悦恐不少（寛弘七 $\frac{7}{10}$ 中40）。

(イ)こわがる、という意味での単独動詞の例は見当たらないが、複合動詞恐思（恐れ思ふ）や驚恐（驚き恐る）があり、やはり前述の不少や無極と一緒に用いられている。その例は、⑩ 亥時許風雨并氷下 雷鳴数度 高大也 恐思不少（寛弘二 $\frac{2}{10}$ 上164）、⑪ 定間從御殿上 蛇降在庭前 從南殿北階上行西方 是内侍所方 衆驚恐無極（寛弘三 $\frac{3}{10}$ 上184）など。

(16) 恨（うらみ）

恨（うらみ）は、恨めしいと思う気持ちである。その程度までは示されていないが、⑫ 又勝算申聞梨事已久 今被下之 此不下必人有恨歎 仍再奏（寛弘五 $\frac{5}{10}$ 上259）のように、有恨歎（恨み有らんか）とある。

(17) 憐（あはれぶ）及びその複合語

憐（あはれぶ）は、気の毒だと思ふという意味である。⑬ 從師許送書 開見 書云 相撲使公時死去由 件男隨身也 只今兩府者中第一者也 日来依此云云憐者甚多（寛仁元 $\frac{1}{10}$ 下115）のように、憐者甚多（憐れぶ者甚だ多し）とある。複合動詞哀憐（かなしびあはれぶ）や嘆憐（なげきあはれぶ）は、⑭ 次仰云 右兵衛尉多吉茂年七十余 当時物上手也 可加任右衛門權少尉者 是立舞間 上達部等多哀憐 仍有仰歎（寛弘七 $\frac{7}{10}$ 中70） ⑮ 各還来申 為友公忠保友從殿出 渡西間所為者 保友已死了云 嘆憐無極（寛弘二 $\frac{2}{10}$ 上134）の例に見られる。⑬の甚だは、憐れぶを修飾していないので、程度を示す表現には入れないが、⑮の無極（きはまりなし）は、前述したように程度を示す表現である。

(18) 嘆（なげく）及びその複合語

嘆（なげく）は、憂い悲しむという意味であるが、本文献には単独の動詞の例は見当たらないようである。複合動詞見嘆（みなげく）、嘆思（なげきおもふ）、思嘆（おもひなげく）は、⑯ 到世尊寺 問前僧正 面所所有疵 見嘆無極（寛弘元 $\frac{1}{10}$ 上94） ⑰ 此暁高雅出家云云 年来無他心相從者 今有事 嘆思不少（寛弘六 $\frac{6}{10}$ 中16） ⑱ 去年九月法興院焼亡 又今年如此 嘆思無極（長和元 $\frac{1}{10}$ 中176） ⑲ 陰陽師医家申可食魚肉（中略） 從今日食之 思嘆千万念 是只為仏法也 非為身（寛仁三 $\frac{3}{10}$ 下194）などの例に見られる。不少や無極は前述したものであるが、⑲の千万念は初出である。千万という数を用いることにより、その程度が並でないことを示している。

(19) 驚（おどろく）及びその複合語

驚（おどろく）は、意外なことにびっくりするという意味である。⑩ 亥時許東方有火 乍驚行向 是当一条方（長和五%下71）のように、乍驚（おどろきながら）とある。複合動詞奇驚（あやしびおどろく）は、⑪ 丑時許広業朝臣来云 為式部丞定佐面打破者 奇驚見所 上脣大腫 有疵（寛弘三%上181）に見られる。驚くの程度を示した表現は見当たらない。

(20) 悲（かなし）

悲（かなし）は、嘆かわしいという意味である。⑫ 久不他行 而長谷僧正重悩者 即馳向其惱事従去年七月也 而未平復 従四月悩 仍極無力 悲思千廻千廻（寛弘五%上259）のように、悲思千廻千廻（悲しく思ふこと千廻千廻）とある。程度を示すのに、千廻を二度重ねて用いることにより一層強めている。

(21) 糸星・糸惜（いとほし）

糸星・糸惜（いとほし）は、かわいそうだという意味である。⑬ 参慈徳寺（中略）事了還程 山東口雨降 上達部乗馬五六人 糸星久見事無極（長和二%中257）、⑭ 惟貞立門前間 家道俗数十見之 甚糸惜見事無極（長和四%下7）の例がある。いずれも、いとほしく見ゆることきはまりなし、だが、⑭の方は、形容詞いとほしを修飾する程度副詞甚だ加わっている点が違う。

(22) 口惜（くちをし）

口惜（くちをし）は、残念だという意味である。⑮ 以公信朝臣令奏 従夜部有犬死穢 非可参明後日五番之由 仰云 不参者 非可召五番 口惜思食（長和二%中237）のように、口惜思食（くちをしをおぼしめす）と用いられている。程度を示す表現にはなっていない。

(23) 心細（こころぼそし）

心細（こころぼそし）は、たよりなく不安だという意味である。⑯ 参御前 而間御悩極重 為他行心細々 思御座 仍奏不可参由（寛弘八%中110）のように、心細々思御座（心細く思ひおはします）と用いられている。心細しの程度は示されていない。

以上、本文献に見られる快・不快の表現について、具体例を挙げ簡単に述べてみた。次ページの一覧表を参照されたい。

五 ま と め

本文献の感情表現について、専ら形式の点からまとめてみよう。異なり語数は、快を表す場合が感悦から涙まで12、不快を表す場合が恐恐から心細まで24、併せて36である。字音語・和語の点では、感悦・恐恐など字音語9、見悦・見嘆など和語27となり、和語のほうが3倍も多く用いられている。和語を品詞別に見ると、悦（慶・喜）・愁など名詞5、聞悦・驚恐など動詞18、糸星（糸惜）など形容詞4であり、名詞は動詞と共に用いられて初めて感情表現になっていることを考え併せると、動詞の比率が更に高くなる。名詞の場合、どんな動詞と結び付いているかを見ると、悦（慶・喜）は奏、啓、申など言うという意味の動詞、涙は流、愁は有と申、恐は成、為、有など、恨は有である。

次に、快・不快の感情を表す単語は、それぞれ自身だけで用いられている場合が多いが、程度を示す表現に目を向けてみると、14種類用いられている。最上級の表現としては、無過斯（これにすぐることなし）がある。程度副詞尤（もとも）や形容詞無極（きはまりなし）を用いることもある。最上級ではないが、程度の並並ならないことを表現するには、形容詞無量（は

かりなし), 程度副詞甚 (はなはだ), 余身 (みにあまる) という言い方, 字音語多端 (タタン)・千廻千廻 (センクワイセンクワイ)・千万念 (センマンネン) などを用いている。また, 如雨 (あめのごとし) という比況の表現もある。これらより程度は低くなるが, 大 (おほきなる) という連体詞を用いたもの, 感悦感悦 (カンエツカンエツ), 為悦為悦 (悦びとす悦びとす) のように繰り返したものの, が見られる。程度が更に低くなると, 多 (おほし) ではなくて不少 (少なからず), 有 (あり) ではなくて非無 (なきにあらず) を用いたものも見られる。快・不快を通じて, 程度を示す表現が目立つのは, 多用されている不少 (すくなからず) と無極 (きはまりなし) の二つである。

快・不快を表す単語と一緒 に用いられている言葉 (程度を示すもの)			なし	繰り返 し	連体 詞		形容詞		形容詞 の否定		程度 副詞		比 況	字 音 語	計		
					大	無極	無量	不少	非無	余身	無過 斯	尤				甚	
快・不快を表す単語 (読み方)			(読み方)	おほ きなる	きは まり なし	はか りなし	すく なから	なき にあら	みに あまる	これに すぐ	もとも	はな はだ	あめ のご とし	タ タン	セン ク ワ イ	セン マ ン ネ ン	
																	2
1 快 を 表 す 場 合	(1)	感悦	カンエツ	2	1	2	3	1			1			1		11	
	(2)	慶賀	ケイガ	11													11
		賀	ガ	19													19
	(3)	随喜	ズイキ	2							1					3	
	(4)	感懐	カンクワイ	1			1									2	
	(5)	満足	マンゾク	2												2	
	(6)	悦・慶・喜	よろこび	5	1	1	1		1		1					10	
(7)	悦・慶	よろこぶ	7													7	
	見悦	みよろこぶ				1										1	
	聞悦	ききよろこぶ				1										1	
	悦思・慶思	よろこびおもふ	2		2	2										6	
	(8)	涙	なみだ	1									1			2	
	(9)	恐恐	キヨウキヨウ	1			1									2	
	2 不 快 を 表 す 場 合	(10)	不快	フカイ	2												2
(11)		不覚	フカク	3												3	
(12)		愁	うれへ	15		1					1	1	2			20	
(13)		愁	うれふ	17												17	
(14)		恐	おそれ	6			1	1								8	
		恐	おそる	7		1	1									9	
		恐思	おそれおもふ				3	1								4	
		悦恐	よろこびおそる				1									1	
		驚恐	おどろきおそる			1										1	
(16)		恨	うらみ	1												1	
(17)		憐	あはれふ	3												3	
		哀憐	かなしびあはれふ	1												1	
		嘆憐	なげきあはれふ			1										1	
(18)		嘆	なげく													0	
		見嘆	みなげく			1										1	
		嘆思	なげきおもふ			2	1									3	
		思嘆	おもひなげく												1	1	
(19)		驚	おどろく	18												18	
		奇驚	あやしびおどろく	1												1	
(20)		悲	かなし												1	1	
(21)		糸星・糸惜	いとほし			2					1					3	
(22)		口惜	くちをし	1												1	
(23)		心細	こころぼそし	1												1	
計			129	2	1	13	1	16	2	2	1	4	3	1	1	1	178